

そだつキャンパス

高橋 義英

元筑波大学施設部企画課主任専門技術職員・施設担当教官室付
現松井建設(株)営業本部営業三部部長

開学 30 周年と聞いて先づ頭にうかんだのは、「もう」と「まだ」の二つであった。赤松林と栗林、畑地と田圃とがキャンパス(予定地)の総てであったのがついこの間であったのにもう 30 年も経ってと云う感慨と、ようやく姿になってきた常磐新線(つくばエクスプレス)がまだ乗れない、と云う思いである。

昭和 30 年代半ばに首都圏整備委員策定の研究学園都市構想による筑波研究学園都市プロジェクトが開始され、その主要機能として総合大学が位置付けられ、時を同じく東京教育大学の移転統合・拡充計画が八王子地区・武蔵丘陵地区・筑波地区を対象として検討され、キャンパス用地の十分な確保・周辺都市機能整備の確実性などから、東京教育大学を母体とした新構想大学の整備が決定した。

昭和 40 年代に入り新構想大学の整備計画が研究機能を学系、教育機能を学群とし、

これにもとづいたマスタープランとして立案され学園の整備が進められた。

東京教育大学の移転統合の用地検討の段階からと考えると、筑波大学の整備プロジェクトは、40 周年と云える。

この間、昭和 39 年から昭和 59 年までの 20 年間にわたりマスタープランの作成・実施計画の立案など施設環境整備計画に施設部員および施設委員会の下に設けられていた施設担当教官室員としてかかわらせていただいた立場で、又、その後の大学の姿を一人のプランナーとして見つづけている立場で、成長するキャンパスについてのべてみる。

パイオニアツリーがシンボルツリーに

大学の南側から構内へ入ると立派な並木道をとある。「ゆりの木通り」と呼ばれる様に、この並木樹は「ゆりの木(祥纏天木・チューリップツリー)」で、今や大学を代表

する様な景観をつくり出している。この木は樹齢が4・50年となっており、この樹種にとっては最盛期を過ぎようとしている。大学がこれから21世紀の発展段階に入るのに並木樹に寿命が来ては困ると言うことになるかもしれないが計画的にはもう一つの仕掛がなされており、冬期にゆりの木が葉を落すとそのすぐ外側に白樺の列植が姿を見せることに気付かれると思う。なぜこのような植栽方式をとったかと言うと、ゆりの木は、その成長速度が早いいため、大学の景観環境を早期に重厚なものとするためのパイオニアツリー(先駆樹)として用いたもので、4・50年経過後には伐採し、後背植栽の白樺が並木として活るように考えた。

しかし、今では、この並木道は「ゆりの木通り」として、その姿が近隣の人々に大学の一つのシンボルとして認知されているようで、今後この並木道の「ゆりの木」を大学のシンボルツリー(象徴樹)として位置付けて活かしてゆくことやその植栽更新の方法なども検討していただけるとよいと思っている。

プロジェクト研究棟は総合研究実験棟

昭和50年代に大学の施設整備が一期の概成を向えたころに「プロジェクト研究棟」の整備が行なわれた。有限期間にプロジェクト研究を集中して行う場として計画

されたもので、プロジェクト研究に携わるスタッフが各学系から集まり、各テーマにそって協同して効率よい研究活動を行える場を提供するもので、研究終了後は次のプロジェクトのスタッフに場を引渡す方式とし施設の効率的な利用を計るための施設で、特定目的の施設とはせず、その時々の研究ニーズによって必要な設備を補充して使用するものとした。

平成10年代になって、学系の研究活動の進展拡充に対応して「総合研究実験棟」の計画整備が各国立大学同様に行なわれるようになったが、この「総合研究実験棟」の計画の基本的な考え方は、まさに「プロジェクト研究棟」の考え方をベースにし、より柔軟な利用を計ろうとするものとなり、筑波大学の整備計画の考え方が大学の枠をこえて成長し、研究活動のより有効な方法として広く使われるものとなっている。

開学30周年を迎えて、開学前の云わば胎動期から直接・間接に施設整備にかかわった関係で、まだ、施設環境管理(ファシリティマネージメント)・構内交通・共同溝と設備システム等々や建築学会賞受賞のことなど、あまり皆さんが知らないことが思

い浮んでいるが、又の機会にしたい。